

地方独立行政法人北海道立総合研究機構 水産研究本部

さけます・内水面水産試験場の発足にあたって

河村 博

地方独立行政法人北海道立総合研究機構ならびにさけます・内水面水産試験場の発足にあたりましてご挨拶申し上げます。

その歴史もあつかう対象も異なる道立の試験研究機関が統合して、ひとつの大きな研究組織として生まれ変わりました。

今から140年ほど前、北海道の開拓のため開拓使が設置されて以来、社会情勢の変遷、経済環境の変化、国際環境の変動に合わせて、道立試験研究機関が設置され対応してきたところです。

そして現在、北海道産業のニーズが多様化複雑化したこと、そして関係者による分野横断的研究の要望の高まりから、道立の22試験研究機関を統合した、地方独立行政法人北海道立総合研究機構が発足したところです。

水産研究本部に所属する、さけます・内水面水産試験場（さけます内水試）は、本道水産業の主要な魚種であるさけ・ますおよび本道の豊かで優れた内水面（川や湖沼、水田水路など）で生み出される内水面漁業・養殖業の振興と持続的な生産を維持するため、新たな気持ちで、試験研究の推進と技術開発、指導普及に取り組むこととなります。

さて、さけます内水試は、その前身である北海道立水産孵化場の時代に、北海道系さけ・ますの統括管理業務を、平成11年度より北海道庁の関係行政部署と共同で取り組んできました。

さけます内水試があつかうさけ・ますは、北海道にとって重要な漁業資源であるとともに、その回遊生態および漁業資源価値から、きわめて国際的な魚種です。そのため適切な資源・増殖管理が自他共に求められると同時に、他国の資源が混じり合う海洋環境にも目を向けておく必要があります。資源評価や環境評価に関する他機関との議論において、研究者が創り出す科学的なデータの蓄積と理論の組み立てが欠かせません。さけます内水試のさけ・ます研究は、北海道の地域的な現場に立ちつつ、世界的な広がりを持った視点で、研

究に取り組んでいく考えています。

他方、内水面漁業・養殖業は産業規模が小さく、先細りの印象を与えています。本当にそうなのでしょうか。いいえ、内水面水産業は規模が小さくとも、りっぱに地域特産の生業として地域振興に役立っています。北海道には大小無数の川が山間や平地をながれ、風光明媚な場所や海岸域には多くの湖沼が点在しています。これらの内水面では、この場所、この時季でなければ手に入らない内水面の資源が生み出されており、これら一期一会の食材を用いた地域特産のお祭りやイベントも行われています。北海道の豊かな内水面環境が、地域限定、季節限定の食材を提供しています。しかし北海道の内水面環境も他の地域と同様に、流域の開発および環境改変により劣化してきていることも事実であり、豊かな可能性を秘めたこれらの内水面環境を保全・修復する研究と技術開発が、さけます内水試に求められる課題のひとつになっています。

さらに、さけます内水試の内水面の研究の一つに、環境・共同・地域振興をキーワードにおいた、生態系サービスの向上に関する研究が考えられています。水域を基盤にした生態系の働きには、水・食料・生息場所・栄養・レクリエーションの場の供給、水質の浄化、生物多様性の保全などをあげることができます。大事なことは、この生態系サービスを維持し機能するために、バクテリアから魚類・鳥類にいたる多種多様な生き物たちの関わりと働きが欠かせないことであり、この点について内水面の生き物をあつかう、さけます内水試の役割が今後ますます重要になることでしょう。

生態系研究では、複数の異なる分野の研究者が共同で調査研究に取り組まなければなりません。北海道立総合研究機構には、さけます内水試のほかに、農業、林業、環境と地質など、流域の生態系を総合的に研究できる条件が整っています。このほかに河川管理者である北海道開発局や土木現業所、市町村などとも連携することで、内水面の

生態系サービスを基盤とした地域振興に結びつく、より質の高い内水面研究の発展が期待されます。

さけます・内水面水産試験場は、今後さらに多様化複雑化する研究ニーズに対応するため、研究者個人の研究能力のアップを目指すとともに、チームで研究開発に取り組むことによる、研究の効率化といい意味でのゆとりの時間を創り出したい

と考えています。

新しく生まれ変わった、さけます・内水面水産試験場をこれからもよろしくお願い申し上げます。

(かわむらひろし：場長)